

『生徒指導上の諸課題に対する実効的な学校の指導体制の構築に関する総合的調査研究（令和元年度調査）』中間報告書』の概要

1. 研究の目的

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターでは、令和元年度から令和3年度まで「生徒指導上の諸課題に対する実効的な学校の指導体制の構築に関する総合的調査研究」（以下「学校指導体制調査研究」とする。）を実施した。この報告書は、「学校指導体制調査研究」の令和元年度調査の結果を分析し、取りまとめた中間報告である（以下「中間報告書」とする。）。

「学校指導体制調査研究」は、中学校を対象に、いじめをはじめ、児童生徒の複雑・多様化した生徒指導上の諸課題の改善にとどまらず、児童生徒の包括的な向社会性を育むことを可能とする実効的な学校の指導体制の諸特性を検討することを目的としている。特に、この「中間報告書」では、生徒の学校への愛着や所属意識である「学校とのつながり」に着目するとともに、支持的な学校環境や社会的資質・行動に関連する各項目を設定し、それがどのような構成体として把握できるのかについて、仮説モデルとの適合度から検証した。また、この「学校とのつながり」が、特に、いじめの加害経験の有無に関連するかどうかについて確認することを試みた。

さらに、「学校とのつながり」は学校でも異なることが想定されるため、「学校とのつながり」を学校の教育的成果の一つとして捉え、その差によって、教員集団の諸特性にどのような違いが見られるのかを明らかにすることを試みた。そのために、教員調査では、支持的・意欲的な学校環境、生徒の情報共有に基づく学校課題の共有と行動といった観点から、生徒の「学校とのつながり」との関連を検討した。

2. 研究の方法

「学校指導体制調査研究」は、二市を対象に、市内の公立中学校の3分の1相当に該当する学校を18校と22校、計40校選定し、生徒指導・進路指導研究センターで作成した「生徒用調査票」、「教員用調査票」及び「管理職用調査票」の3種の質問調査票を送付・回収した。

表1 令和元年度調査における
各質問調査票の調査対象数や回答学校数、回答者数、回答者率

	調査対象数（人）	回答学校数（校）	回答者数（人）	回答率（％）
生徒調査	18,802	40	17,276	91.9
教員調査	1,280	40	992	84.1
管理職調査			84	

※回収率は、回答者数を調査対象数で除して算出している。

学校の選定に当たっては、小規模、中規模及び大規模の学校について、それぞれ規模別に学校数が均等となるように抽出した。

令和元年度調査における各質問調査の実施時期は、令和元年 11 月末～12 月末にかけて行った。また、令和元年度調査における各質問調査票の調査対象数や回答学校数、回答者数、回答者率は以下のとおりである（表 1）。

3. 分析結果の概要

分析結果の概要として、第一に、生徒調査の尺度の因子構造、仮説モデルへの適合度の検定、「学校とのつながり」といじめ加害経験の関連に関する検定の結果について述べた。第二に、教員調査の因子構造と仮説モデルへの適合度の検定の結果、第三に、生徒調査と教員調査間の相関分析の結果について述べた。

なお、各調査における尺度の因子構造を分析するために実施した因子分析では、最尤法、バリマックス回転、固有値 1 以上で行うとともに、因子負荷量は.40 に満たない項目は除き分析を行うこととした。また、信頼性については、クロンバックの α 係数を確認し、 $\alpha = .80$ 以上を採用することとした。

（1）生徒調査における尺度の因子構造と仮説の検証

生徒調査においてあらかじめ設定した仮説に基づき、生徒調査において因子として抽出された「学校とのつながり」をアウトカムとしての潜在変数、教師の意識の注力や努力により変化可能な「教師による支援」と「規律に関する指導」をインプットとしての潜在変数と規定し、「教師による支援」と「規律に関する指導」を含む、「クラスの雰囲気」や「クラスのストレス」の 4 因子で構成される概念を学校の教育活動の基盤となる「支持的環境」とした。そして、「自己有用感」、「他者尊重」及び「役割責任行動」の 3 因子で構成される概念について、生徒指導を通して育まれる「社会的資質・行動」とした。

これら計 8 因子の因子構造の関係について、生徒調査で設定した仮説との適合度を共分散構造分析（多重指標モデル）にて検定した。図 1 は、「学校とのつながり」をアウトカムの潜在変数とし、「教師による支援」と「規律に関する指導」とを相関するインプットの潜在変数として因子間の関係を示したパス図である。

また、この「学校とのつながり」を説明変数、いじめの加害経験ダミーを従属変数とするロジスティック回帰分析を行った。この結果から、「学校とのつながり」を説明変数、各種のいじめ加害経験の有無のダミー変数を従属変数としたモデルについて、全て $p < .001$ で統計的に有意であったことが確認された。

すなわち、「学校とのつながり」が強いほど、いじめ加害経験がない傾向にあることが示され、生徒のアウトカムとして設定した「学校とのつながり」は、少なくともいじめの加害経験の観点において、生徒指導に関する学校パフォーマンスとして、一定の妥当性と有用性を有することが確認された。

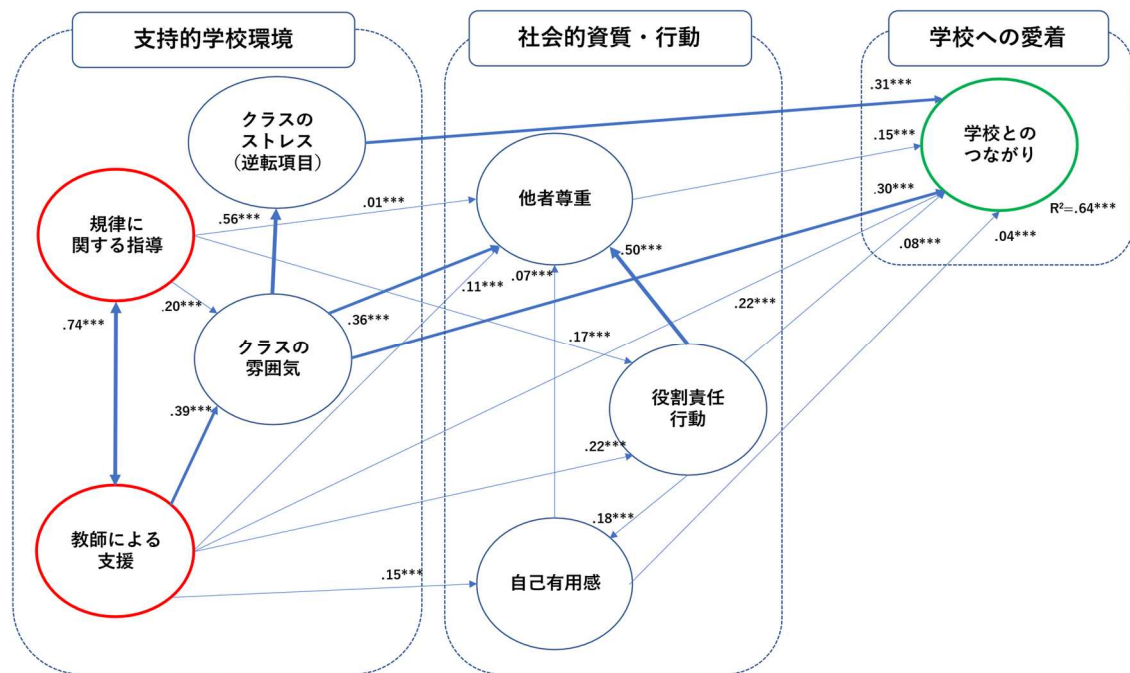


図1 生徒調査のパス図 (N=15,449)

(2) 教員調査における尺度の因子構造と仮説の検証

教員調査においてあらかじめ設定した仮説では、教職員集団による支持的・意欲的な学校環境が形成されることを基盤として、教師の支持的態度や生徒指導の充実、授業の工夫・改善へとつながることを想定した。

教員調査の全教員対象の項目から得られたデータより「支持的・意欲的な学校環境」の下位尺度として「教職員同士の学び」と「仕事への意欲」、「生徒の情報共有」、「課題・方針の共有と行動」の4因子が確認できた。また、「生徒への指導・支援の充実」の下位尺度として「指導の充実」、「授業改善」及び「支援的態度」の3因子が確認できた。これらの因子構造の関係について、共分散構造分析(多重指標モデル)を用いて仮説の適合度について検定を実施した(図2)。図2は、抽出された因子間の構造をパス図で示したものである。

図2について、以下に記述する要素間の関連は、全て $p < .001$ で統計的に有意であることが確認された。「教職員同士の学び」は「仕事への意欲」に.60, 「生徒の情報共有」に.47, 「課題・方針の共有と行動」に.26, 「支援の充実」に.24の関連があった。また、「仕事への意欲」は「生徒の情報共有」に.16, 「課題・方針の共有と行動」に.14の関連があり、「生徒の情報共有」は「課題・方針の共有と行動」に.36, 「指導の充実」に.47, 「授業改善」に.37, 「支援の充実」に.46の関連があった。そして、「課題・方針の共有と行動」は「指導の充実」に.32, 「授業改善」に.37, 「支援の充実」に.18の関連があった。アウトカムとして想定した3因子の決定係数については、「指導の充実」は $R^2 = .50$, 「授業改善」は $R^2 = .44$, 「支援的態度」は $R^2 = .57$ であった。

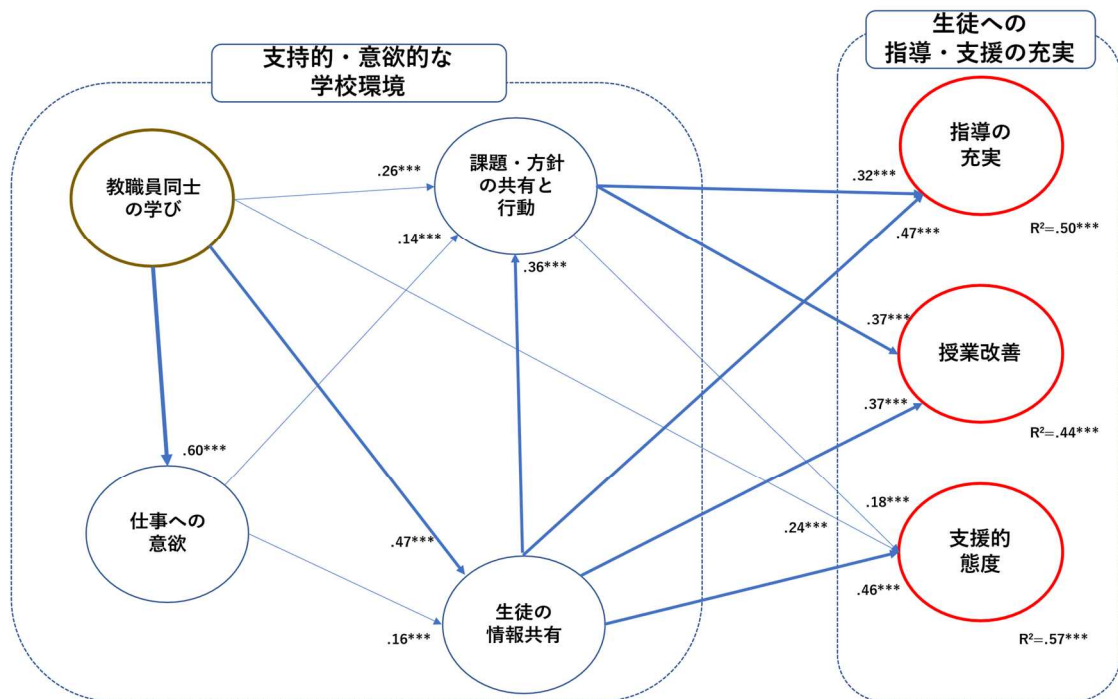


図2 教員調査のパス図 (N=942)

(3) 生徒調査と教員調査との相関分析

生徒調査と教員調査の変数間の関係を検討するために、各因子の下位尺度得点間の相関分析を行った。まず、教員調査と生徒調査をひも付ける上での観測単位を学校とし、学校ごとの教員調査と生徒調査の各因子の下位尺度得点の平均値を用いて相関分析を行った。

表2 「生徒への指導・支援の充実」(教員調査)及び「支持的学校環境」(生徒調査)の各下位尺度得点間の相関関係

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	M	SD
(1) 支援的態度 (教員)	-	.58**	.73**	.37*	.38*	.31	.21	3.29	0.16
(2) 指導の充実 (教員)		-	.59**	.30	.53**	.40**	.49**	3.22	0.18
(3) 授業改善 (教員)			-	.41**	.49**	.48**	.49**	3.04	0.17
(4) 教師による支援 (生徒)				-	.83**	.79**	.52**	3.08	0.13
(5) 規律に関する指導 (生徒)					-	.87**	.75**	3.42	0.15
(6) クラスの雰囲気 (生徒)						-	.81**	3.10	0.18
(7) クラスのストレス (生徒)							-	2.93	0.18

* $p < .05$, ** $p < .01$

注) クラスのストレスは逆転項目である。

具体的には、教員調査における「生徒への指導・支援の充実」の下位尺度である「指導の充実」、「支援的態度」及び「授業改善」の3変数と、生徒調査における「支持的学校環境」

の下位尺度である「教師による支援」と「規律に関する指導」、「クラスの雰囲気」、「クラスのストレス（逆転項目）」の4変数、計7変数の相関分析を行い、変数間の関係を検討した。

表2は、各変数の平均値と標準偏差、相関分析の結果を示したものである。表2の色塗りの欄は、教員調査の「支援的態度（教員）」、「指導の充実（教員）」及び「授業改善（教員）」の3変数と、生徒調査の「教師による支援（生徒）」と「規律に関する指導（生徒）」、「クラスの雰囲気（生徒）」、「クラスのストレス（生徒）」の4変数との相関関係を示した箇所である。この結果から、教員側による生徒への指導や支援に関する評価と生徒側による教員の指導や支援への評価を含む学校環境の評価との間には弱から中程度の相関があり、教員の生徒指導や教育相談に関する注力や努力は生徒の学校環境に影響を及ぼす可能性が示唆された。

4. 考察

(1) 「学校とのつながり」の構造から見る生徒指導の留意点

生徒調査からは、支持的な学校環境が基盤となり、生徒指導の目指すところの社会的資質や行動、態度の育成へとつながり、学校への愛着や帰属意識としての「学校とのつながり」に帰結していくという仮説と、その「学校とのつながり」を強固なものにすることで、生徒がいじめ加害へと向かうことを防止しうることについて、一定のエビデンスをもって示すことができた。

生徒調査では、支持的な学校環境を想定するものとして、とりわけ、教員の意識の注力や努力によって変化しうる要因をインプットとなる「保護因子」として設定した。それは、教員の支持的態度や生徒指導の共通理解・共通実践に関する生徒側からの評価であり「教師による支援」と「規律に関する指導」という因子として抽出されたものである。これらには強い相関が確認された。つまり、教員による支援的なスタンスと規律に関する指導の充実が相互に関連しつつ、生徒にとって、より安心・安全を感じられるクラスの雰囲気へとつながり、それが生徒の抱えるクラス内でのストレスの緩和に肯定的な影響を及ぼし得る。

一方、生徒調査においてアウトカムに設定した「学校とのつながり」は、「社会的資質・行動」として設定した「役割責任行動」や「自己有用感」、「他者尊重」からの影響よりも、「クラスの雰囲気」や「クラスのストレス」といった「支持的学校環境」に関する因子からの影響をより強く受けている可能性が示された。「社会的資質・行動」の育成は「学校とのつながり」に肯定的な影響があると考えられるものの、その関連の程度については、令和元年度調査のデータからは必ずしも強いものとはいえなかった。また、「支持的学校環境」に関する各因子から、「社会的資質・行動」への各因子に対しても、関連はあるものの、関連の程度は強いものとはいえなかった。

上記の生徒調査の仮説の分析を通して、学校の生徒指導の取組を振り返る上での留意点としてあげられることは、上述の生徒側による教員の支援的態度や規律に関する指導の充実に関する評価の意義についてである。

「学校とのつながり」の意識は、教員の介入によって直接的に高めることは困難であると推測される。だが、「教師による支援」と「規律に関する指導」は、教員の意識的な取組によって変容可能な動的要因と見なすことができる。そのため、例えば、「教師による支援」と「規律に関する指導」の因子から影響を受けている項目について、肯定的に回答する生徒がどれほどいるのかを定期的に確認する等の取組は、教員の生徒指導に対する生徒の側からの評価の情報であり、学校や学年、あるいは、教員自身で生徒指導の取組を振り返る上での検討材料になるといえよう。

（２）学校の生徒指導体制づくりの留意点

教員調査の結果からは、「教職員同士の学び」因子をインプットとして、それが教員にとっての「支持的・意欲的な学校環境」の核となり、「生徒への指導・支援の充実」というアウトプットへとつながることが、一定程度のエビデンスをもって示すことができた。

生徒調査と同様に、教員調査においてもインプットとなる「教職員同士の学び」因子は、教員による意識の注力や努力で変化しうる動的要因である「保護因子」としての特徴を有するものとして設定している。この「教職員同士の学び」因子は、教員の仕事に対する意欲や生徒の情報共有、学校の課題・方針の共有とそれに基づく行動へと影響を与えている。そして、そのことが、教員による学校の指導・支援の充実の程度に関する評価へと一定程度影響していることが明らかとなった。

ここで重要となるのは、教員側による生徒への指導・支援の充実度の評価（教員調査で「支援的態度」、「指導の充実」及び「授業改善」として抽出された3因子）が、果たして生徒側による教員の取組への評価を含む「支持的学校環境」（生徒調査で「規律に関する指導」と「教師による支援」、「クラスの雰囲気」、「クラスのストレス」として抽出された4因子）と関連があるのかどうか、また、あるとしたらどの程度の関連があるのかということである。これは、教員調査においてアウトプットとして設定した「生徒への指導・支援の充実」の尺度に関する妥当性の検証にもつながるものである。そして、前述の表2で示したとおり、それぞれの変数間で弱から中程度の相関が示され、教員調査における「生徒への指導・支援の充実」の妥当性について、一定程度確認することができた。

上記の分析を通して、学校の生徒指導体制づくりの取組を振り返る上での留意点として、教員調査のアウトプットと生徒調査のインプットは、決して因果関係を示すものではないが、関連性があることを踏まえると、教員による生徒への指導・支援の充実に関する評価や意識を高めるために、教員にとって支持的・意欲的な学校環境を管理職や教職員同士で、どのように醸成、構築していくことができるか、当事者間で検討していくことは意義があろう。